

## 湖と生きる

話題を呼ぶ現代美術作家

吉田 芙希子さん

聞き手・植田 耕司  
写真・長井 泰彦自分流の独特の制作を通して  
憧れの美青年像を追求

理想の美青年像「IKEMEN」をモチーフとし、半立体の作品を発表して今、注目を集めているのが美術作家で大津市在住の吉田芙希子さん（30）だ。京都市立芸大の学生時代から自由な視点で話題作を次々と発表、いくつもの公募展で入賞を重ねて、平成29年度には今後一層の活躍が期待される若手に与えられる滋賀県次世代文化賞に輝いている。IKEMENというのは吉田さん独特の形容で、いわゆる見た日本意の「イケメン」とは少し違うようだが、その辺はどうなのだろうか。好奇心も募り、吉田さんを制作拠点としている京都市山科区のアトリエに訪ねた。

—素晴らし〜活躍ですね。小さい頃から美術家を志望されていたのですか。

「いいえ、そうでもありません。高校に進

学してからクラブ活動の美術部があるのを知ったぐらいの生徒でしたから、現在のような美術家になるなんて考えもしなかつたですね。もちろん小さいころ

から絵を描くのは好きだったので、すぐ入部して風景画も描いていました。高校では先輩が公募展に出品しておられたので私もそれに倣って作品を出し、県展で入選したこともあります。大学受験を考える時期に何気なく母に『美大に行ってもいい』と聞いてみたところ、いいよと言われたのでそ

## よしだ ふきこ

- ・1988年 大津市生まれ・在住
- ・2013年 京都市立芸術大学大学院美術研究科油画修了
- ・2018年 第21回岡本太郎現代芸術賞展入選
- ・2013年 「H.P.FRANCE 賞」「シュウ・ウエムラ賞」/アートアワードトーキョー丸の内▽2016年 BIWAKO大賞展大賞▽2017年 滋賀県次世代文化賞など受賞
- ・現在、京都市を拠点に活動



の気になり、準備を始めました。国公立ではセンター試験と実技があり、画塾に通って、デッサンや色彩構成などを1年間みっちり勉強しました。ありがたいことに現役で京都市立芸術大学に受かりました」

「美術学部的美術科に入学し、2年時に日本画、油画など5つあるコースのどれか進路を選びます。油画の方がより自由度が高いと思います、専攻したのです。私は小さい頃からアニメや漫画に影響を受けた落書きのような作品をひたすら描いていました。自

分の道をどうするか悩んだのですが、良い先生方に恵まれ、『自分の興味から目をそらすず、それを追求しなさい』と言っていたいただきました。アニメを題材にして活躍しておられる現代美術家も多くおられます。私も好きなことをさせてもらって本当によかったと思います」

——その時すでに「I K E M E N」を選んでいたのですか。テーマに選んだきっかけなども話してください。

「小さい頃からアニメが大好きな少女でした。でも、アニメやテレビの漫画がめちゃめちゃに好きかというところ、そうではなくて。興味を引かれたのは、アニメによく登場する、現実のものではない美青年だったと思うのです。特に少女漫画に出てくる美青年は、国籍も時代もあいまいで、顔は日本人ではなく、おそらく西洋人に近い容姿を持った憧れの存在です。イケメンというと伝わりやすいのですが、世間的に言われるイケメンと私がイメージするものとは少し違いますので、『I K E M E N』とローマ字表記にしています。

私は学部を卒業後、大学院に進みました。修士課程の修了作品が『A Wind



y h i l l』です。壁全体を創作空間に見立て花を散らせた作品で、縦2・14呎、横幅3呎、粘土と発泡スチロールで作っています。この時は「Paradise」という作品と二つ並行で取り組み、10月ごろから2月までみっちり4カ月かけて仕上げました。私の作品はご覧のように、レリーフ（浮き彫り）のようにも立体のようにも見えます。立体という彫刻のものにな



ってしましますし、私は線描で立体を表現しようと模索していますので、レリーフと立体の間の『半立体』、表現を変えて言えば2・5次元の世界です」

「IKEEMENの作品ですが、手に取れるような愛でられる作品にも興味があり、大作だけでなく、最近はプローチのような手頃な作品も手がけています。偶然ですが京都の雑貨屋さん知り合い、そうした縁で、雑貨店やギャラリーにも作品を置いてもらっています。雑貨的な意味合いで作っているのもあれば、アートとして限定で作っているものもあります。買ってくださる方はプローチとして買ってくださるので、どちらにしろ、可愛いなと思っていただけたら嬉しいです」

— 今どのような生活のリズムで制作活動をおられるのですか。

「大学時代はずっと自宅から通ったのですよ。湖西に住んでいますので、JRで大学最寄りの京都線桂川駅まで行き、そこに置いてあるスーパーカップで大学に行ったり、材料を求めてホームセンターに行ったりの毎日でした。制作に取りかかると集中するので、何時に学校を出ると終電に間に合うといったぎりぎりの大学生活でしたね。社会人になっても実家にお世話になっており、そこから仕事場やアトリエなどに通う生活スタイルは全く変わっていません。」

平日は週3でゲーム会社に通いデザインのアルバイトをしています。昔、『ファイナルファンタジー』に夢中になりましたが、ゲームの世界では、異世界の美青年が出てくるのです。ブラウン管の中にある現実とは異なる世界でとてもひかれました。もともとデジタルで作るものに興味があり、ゲームの世界もどこか私の作品とリンクするところがあるように思えるのです。土日は大阪のテーマパークで修復の仕事をしています。テーマパークでは夜、パレードがあります。キャストが



パレードフロートに乗り、園内をパレードして回り、ファンと交流するイベントです。そのフロートの修復をしたり、キャストが持っている小道具を直したりするのが主な仕事です。デザインの仕事もテーマパークの仕事も現実とは違う世界を表現することで、私の制作と関係することが多く、とても刺激になりますね」

「2年前に友だちからJR山科駅からさほど離れていないこのアトリエを引き継ぎ、制作活動の拠点となっています。仕事のない日や早めに帰宅できた時は、途中下車したりして、ここにこもっています。制作には、生活とは違う区切られた空間が絶対に必要で、私にとっても一番落ち着く場所です。なかなか

少年の日と風 2018  
90cm×58cm

（制作の）時間が取れないのが悩みですが、短時間でもここにいる時間を大事にしたいと考えています」



lovely lovely 2017 274cm×385cm 写真：大島拓也 提供：京都市立芸術大学

——ところで、受賞歴を拝見するより、評価ですね。

「受賞が続いたのは確かに恵まれているかもしれませんがね。自分の興味があるものの核心に迫りたくて制作し、『ある意味で迫ったかも』と制作中に感じた作品が他人の目に留まり、賞などに選ばれるのは本当に光栄です。しかし、私の作品は、ある意味で人の興味を引きやすいものをテーマに選んでいる面もあり、分かりやすい造形なので評価されたのだと感じる時もあります。いいねと言ってもらってもそれで終わることも多いのです。私としては、どういうことを考えて作っているのか、コンセプトをもっと自覚し、深めていかなければいけないと思っています」

——最後に、心算と滋賀について考えていますか、また、琵琶湖について何か思い出があれば話してください。

「湖西の実家から琵琶湖が見え、家を出る度に見える景色に、ああ、ありがたいなと思います。母なる琵琶湖。恵まれた自然に囲まれて生活していることを改めて感じます。いつか湖のほとりにアトリエを構えるのが夢。これからももっと頑張っていきたいと思っています」

